

むかし、あるところに、若者がいて、器量のいいお嫁さんをもらいました。あんまり器量がいいもので、若者は、毎日、お嫁さんの顔ばかり見ていて、いつこうに田んぼへ仕事に出ようと思いませんでした。とうとうお嫁さんはいいました。

「あんた、あんた。そんなに毎日わたしの顔ばかり見て仕事しなかったら、食べていけなくなるよ。わたしの姿を紙に描いてあげるから、それを竹にはさんで田んぼのあぜにさして、見ながら仕事をしてくださいな」

「ああ、わかった」

若者は、お嫁さんに絵を描いてもらうと、田んぼのあぜにさして、それを見ながら仕事をしました。

ところがあるとき、大風がふいてきて絵が飛んでいってしまいました。

「ああ、えらいことになった」

若者はあとを追いかけていきましたが、絵はどんどん飛んでいって、とうとう見えなくなってしまうました。

お嫁さんの絵は、お殿さまの屋敷まで飛んでいきました。お殿さまは、庭で絵を拾うと、

「なんと器量よしのきれいな女だなあ」いって、家来に、

「この女、どこにいるのか探してこい」といいつけました。

家来は、絵を持ってあちこち探しあるいて、とうとう若者がお嫁さんと暮らしている家を見つけました。

お殿さまは、若者をよびつけると、むつかしい問題をふっかけました。

「灰で縄をなつて持ってこい。そうすれば絵は返してやる。できなかつたらおまえの嫁をわしによこせ」

若者は、

「灰で縄なんてなえるはずがない」と、青くなって帰ってきました。お嫁さんは、

「そんなこと、わけはない。わらをよくだたいてやわらかにして、塩をつけて縄になつてから燃やしたら、そっくり灰縄がのこりますよ。それを持っていけばいいんです」と

いいました。

若者はお嫁さんのいったとおり、わらをたたいて塩をつけ、縄になって燃やして灰縄を作りました。そして、お屋敷に持って行って、

「灰縄を持ってきました」と、さしだしました。

すると、お殿さまは、こんどは、

「では、打たん太鼓たいこの鳴る太鼓を持ってこい」といいました。

若者が、青くなってうちに帰り、

「打たなくても鳴る太鼓なんてあるだろうか」というと、お嫁さんは、

「そんなこと、わけはない。畑に飛んでるミツバチをたくさんつかまえてきて、太鼓の中に入れてから、太鼓に皮を張ればいいんです」と教えました。若者がミツバチを太鼓に入れて皮を張ると、ミツバチが太鼓の中から出ようとして皮にあたって、ブンブンドンドン音をたてました。

若者は、お屋敷に太鼓を持って行って、

「打たん太鼓の鳴る太鼓です」といって、さしだしました。

お殿さまは、

「では、こんどは、この曲がった九穴くあなの貝に糸を通してこい。通せなかったら、おまえの嫁をわしによこせ」といいました。

若者がまた青くなって帰ってくると、お嫁さんが、

「そんなこと、わけはない。貝の穴の入口に黒砂糖くろざとうをぬって、反対がわの穴から、細い糸をつけたアリを入れたらいいんですよ。アリは黒砂糖したを慕したっていくから、糸が通りま

す」と教えました。

若者がいわれたとおり、貝の入り口に黒砂糖をぬって反対がわからアリを入れると、ほんとうに糸が通りました。お屋敷に持っていくと、お殿さまは、

「おまえはかしこいいい嫁をもらったなあ。いつまでも嫁をだいじにするんだぞ」といいましたとき。

おしまい。

原話…『雪国のおばばの昔』水沢謙一／講談社

再話…村上郁